

# ちょっと名大史

## 初の博士号授与から100年

『名古屋大学プロフィール2025』によると、名大は国立の名古屋医科大学となった1931（昭和6）年5月から2024（令和6）年度までの間に、博士の学位を27,072名に授与してきました。ただ、県立の愛知医科大学時代にまでさかのばれば、初の博士号授与は1926（大正15）年1月で、ちょうど100年前になります。

1920年7月に学位令が改正され、大学に学位授与権が付与されました。同年6月に愛知県立医学専門学校から昇格した愛知医大でも、1922年11月に学位規程を定めました。博士論文（正式には学位請求論文）の審査手数料は100円で、当時の銀行員の初任給が50円くらいでしたから、現在の57,000円に比べるとかなり高額です。

学位規程は定めたものの体制が整わず、実際に学位審査が始まったのは1925年からでした。そして1926年1月23日、中島潮造が愛知医大授与第1号の医学博士になりました。博士論文の主論文は、「蛋白体及葡萄糖ノ

硝子体内注入ノ作用ニ就テ実験的研究」でした。

中島潮造は、1899（明治32）年に愛知医学校（愛知医大の前身）を卒業後、翌年には同校の臨床病院である愛知病院の助手となり、眼科部で勤務しました。1916年には愛知医専教諭に任命されますが、直後に辞職して名古屋市内で開業し、学位取得時には40代半ばを過ぎていました。1920年の学位令改正までは、博士論文は帝国大学でしか審査できなかったのです。

博士号を望む愛知医専や愛知医学校の卒業生たちにとって、学位令改正と愛知医大昇格は待望のことだったと思われます。当時、小口忠太教授の眼科学教室では、卒業生が世代を問わず出入りして競うように研究していましたといいます。中島潮造もその一人でした。

愛知医大では、1931年4月までに84名に博士号を授与しました。名大の博士号授与数には、この数も加えるべきなのかもしれません。



1



3



4



2

- 1 中島潮造（1878-1945、写真は1914年頃の愛知県立医学専門学校助教諭時代）。のちに愛知県医師会会長を務めた。
- 2 小口忠太（1875-1945、写真は1921年頃）。「小口病」の発見で国際的にも知られる。1933年に日本学士院賞の前身の一つである東宮御成婚記念賞を受賞した。1926年から27年にかけて愛知医科大学学長を務めた。
- 3 中島潮造の博士論文（国立国会図書館所蔵）。主論文4冊、参考論文6冊から構成されていた。この写真は、主論文の1冊目（独文）の表紙。
- 4 名古屋帝国大学が1939年11月に授与した医学博士の学位記（東海国立大学機構大学文書資料室所蔵）。学位記の番号は、1939年4月の名帝大創立後、改めて1号から付けられた。

名古屋大学の卒業生、  
現役・退職後の教職員の方々へ  
**名大史をつむぐ資料を  
大学文書資料室に！**



### ■ 在学時の配布物

（学生便覧、シラバス、試験問題、課外活動の資料…）

### ■ 教育・研究活動、大学・部局運営に関する資料

（各種書類、会議のメモ、備忘録、スクラップ記事、写真…）

### ■ 校費による印刷物・刊行物

（冊子、パンフレット、ポスター…）

### ■ ご退職関係の記念冊子・記念論集・業績集…

など

※その他、ご処分予定の資料についても、まずは下記へご一報ください。